

## 岡野君の思い出

1977年卒 野崎 純一



岡野 元成 (旧名裕之)  
2017年11月13日病没  
遺族 妻恵子様

岡野元成君の訃報に接して驚きました。  
そこで、現役時代の思い出などを書いて冥福を祈りたいと思っております。

私たちの世代が入部したのは、1973年でした。この1973という数字は卒業時に同期会として「ななさんかい」という名称の元になったもので、そのために忘れることはありません。

私が入部した当時の航空部は、3年生が二人、2年生が二人（うち一人は間もなく退部）というさみしい状況で、これを一新すべく私たち新入生が大量にリクルートされました。

その中の一人が岡野君でした。彼の思い出とい

えば、なんといっても広島弁でしょう。広島出身で、訛りが抜けないというよりも、誇りをもって、使い続けていたのだと思います。

先斗町であって新入歓迎コンパの席でも、広島弁で広島の艶話を披露したときには、先輩も大うけしたものです。

クラブ内での活動は、私と自動車係となり、ウインチ曳航の担当をしていました。何年か前の翔友でウインチの紹介があったと思いますが、そのときの写真に写っているのが岡野君と私です。

彼は在籍の後半はフライト活動を行いませんでしたが、卒業までは在籍しました。

その後同期会で何回か会う機会がありましたが、彼の広島弁は全く変わっていませんでした。何回目かの同期会で、改名したということを知りました。元成というのはその頃に改名したものです。やはり広島という土地柄で、言葉や歴史に対する感情が独特なのだと感じた次第です。

今一度岡野君のご冥福を祈ります。

## 追悼 鳥田 一英君



鳥田一英 2017年9月 病没  
遺族 妻孝子

鳥田一英君の眠る地に行きました。小生この街は50年ほど前が最初で以来数え切れないほど訪れた所です。だが鳥田君がこの街の事を語った事は一度も有りませんでした。

春彼岸入りの日、新幹線から港へ。県境の海峡の彼方の山の稜線、一際聳える山腹から噴火のように立ち昇りたなびく雲。フェリーのデッキに立つと鷗が数十羽追尾して強い向かい風の中乱舞する景色は寂しい船路の小生を和ませて呉れるものでした。30分で着岸、鳥田家の菩提寺はさほど遠くない街中に有りました。来意を告げると坊守様が案内して下さり納骨の時の事、英国からの姉君の墓参、線香はこの様になされていましたよ、などお話し下さいました。墓所は大正時代に一度改められたらようで100年の時の経過が偲ばれました。

ただ一カ所だけ真新しいモルタルの目地が有りました。私はそれを眼にして鳥田君はこの石の下に納骨され再び封をされたのだと実感しました。

墓参後にご住職よりお部屋に招かれて、以前三

1964年卒 豊浦 順真

人の妹さん達がここに座ってお話されてましたよ、と云われたソファに座って鳥田君のお話を伺う事が出来ました。ご住職は関東に転居されたご門徒の方々と会うために何度も上京されたそうで、鳥田君は東京駅まで出迎えたりして毎回参加していたとの事でした。

福岡の花形産業の地で成長し京都へ、卒業後に関東へ、そして又福岡へ、再び関東へと活躍の場を移して行った鳥田君が何故にこの地を終焉の場として切望して生を終わったのか、私は当初不思議な感がしておりますがこの疑問は氷解致しました。鳥田君にとっては父祖のそして自らの源流の地であったのです。

我等が入学したのは第一次安保闘争の最中、1960年の春。「航空部」は現役先輩併せて10名強、そこへ一挙に15名程の新人として我等は入部した。次年度からの部員数増加のきっかけとなった年次だと思えます。

上回生と成ってからの鳥田君は主務として関東支部の早稲田大学あたりと提携して部活の場を広げようと奮闘していました。彼の特色は知恵を巡らせ作戦を立て、人を動かしてゆくという交渉力であったと思います。

毎年、妻沼や樺島紳一郎氏邸の観桜会などで集まっては騒いでいたがプライベートな事には踏み込まないのが暗黙の了解事項で鳥田君の社会人、家庭人の有り様は尋ねた事は無い。私が皆さんへ伝えられるのは出会いの数年間と黙して語らぬ地の事のみであります。

死去の報と墓参への道を開いてくれた山上皓太郎君へ深謝致します。

合掌